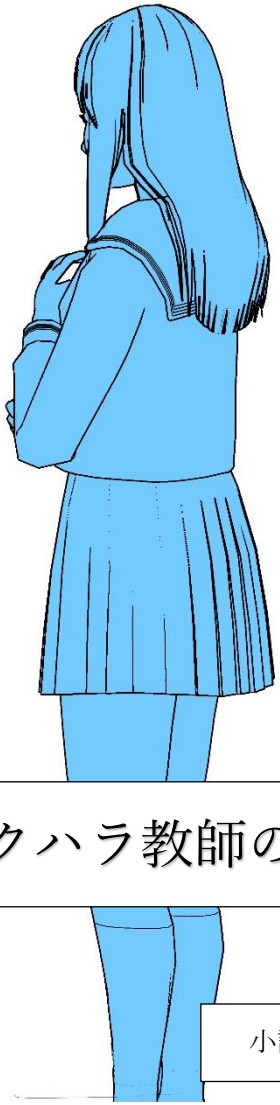

嫌われセクハラ教師の淫行

小説モーメント

一日の授業が終わり、栄帝学園一年B組の教室は瞬く間に活気づく。
部活へ行く者、今日はどこに寄り道しようかと相談する生徒など、顔を輝かせている。
白石千音星（しらいしちとせ）たち、一年生は栄帝高校に入学して二ヶ月がすぎようとしていた。
私立の名門校へ入学し、抱いていた不安や緊張は緩み、新一年生たちは誰もが高校生活を楽しんでいた。
「千音星、フラッペ飲みに行かない？」

「ごめんなさい。今日は生徒会の集まりなの」
誘ってくれた友だちにすまなさそうに答えた。
光沢のある長い髪、白い肌、スラリとした肢体。可憐な少女白石千音星はクラスのまとめ役で、生徒会役員である。
「じゃあ、仕方ないわね」
「また、誘ってね」
「ええ」
誘いを断られたクラスメイトは残念そうにうなずき、自分の席へ戻っていく。
千音星は鞄を持って、生徒会室へ向かった。
廊下ですれ違う生徒たちは皆、振り返って千音星の姿をみるのだった。
一年生の女子にしては背が高く、スレンダーな身体つきをしていて、男を魅了している。
「こんにちは」と挨拶され、千音星もそれに笑顔で応える。

千音星は生徒会室の扉を開ける。
部屋の中には、書記を務める先輩、橘瀬里奈（たちばなせりな）がいた。
「あら、千音星ちゃんいらっしゃい」
眼鏡をかけた知的な雰囲気の美人、三年生の瀬里奈が声をかける。
瀬里奈は、男子の間でも人気があり、告白された回数は数知れないという。
「失礼します」
千音星は頭を下げて。
「いいのよ。まだ、みんな来ていないし、それに私も今来たところだから」
優しく微笑む瀬里奈の言葉に安心したのか、千音星は部屋の隅にある椅子に腰かける。
「千音星さん、コーヒー飲む？　インスタントだけど」